

つりおんな

釣女

〔解説〕昭和十一年（一九三六）初代鶴澤道八の作曲、榎茂都陸平の振り付けで四ツ橋文楽座で初演された景事です。明治十六年（一八八三）狂言の「釣針」を元に常磐津の「釣女」が作られ、明治三十四年（一九〇一）「戒詣恋釣針」という題名で歌舞伎の舞台劇として上演されました。本作は、これを文楽に取り入れたものです。能を原点とする演目には「寿式三番叟」「勸進帳」等がありますが、その厳肅な雰囲気とは異なり、本作は狂言ものならではのユーモアが人々の笑いを誘う作品です。

〔あらすじ〕ある独身大名が妻を授けてもらおうと、同じく独身の太郎冠者（たろうかじゃ）を供に西宮の恵比寿様に詣でます。その夜早速「妻となるものは西の門にいる」とお告げがあり、行ってみると釣り竿が一本落ちていました。釣の好きな恵比寿様が、これで妻を釣れということだろうと、大名が試みてみると、世にも稀な美女が釣れます。二人の仲むつまじさを見た太郎冠者が焦って自分も釣り糸を垂れると、やはり女性が釣れます。喜んだ太郎冠者が、末永く添い遂げることを誓ってかぶり物を取ると、二目と見られぬ醜女だったのでした。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

抑もこれは猿樂の、昔よりしてその業の、おかしといひし狂言師。名に大蔵や鷺流の、姿を写す釣女。

「かやうに候ふ者はこの所の大名でござる。ヤイ〜太郎冠者あるか」

「ハア」

「あるか」

「ハアお前に」

「ゐたか」

「ハア」

「ねんなう早かった。汝も知るごとく、この年まで定まる妻がない。承れば西の宮の恵比須三郎殿は福者ともうすこと。これへ参り妻を申し受けうと存するが、何とあらうぞ」

「これは一段のことござりまする」

「さうば女供をせう」

「参ります〜。誠に仰せのことごとくござります。西の宮の木

比須三郎殿へ参るがようござりませう。私も定まる妻がござりませぬによつて、ついながら申し受けませう」

「扱々おのれは率爾なことをいふものぢや。恵比須三郎殿とこそいへ、木比須三郎ともうすことがあるものではない」

「ハテ絵にかいた折は恵比須三郎ともうし、木で造つた折は木比須三郎ともうしまする」

「なかなか、汝は物知りでおりやる。それがしは道不案内ぢやほどに、名所旧跡を語り聞かせよ」

「畏つてござります」

「さらば急いで参らふ。サア〜来い〜」

「参ります〜」

「サア〜来い〜」

「参ります〜。イヤナウ頼うだお方、まづ参るほどにこれがはや」

「小唄に唄ふ奈良法師、行くも戻るも心のとまるも山崎の

く女郎と涅槃の長枕。結ぶ縁しの尼ヶ崎。ハハハハハ

「面白い」。シテ向ふに見ゆる山はなに山ぢや」

「ハテあれは山でござる」

「こなやつ。山は山ぢやがなんともうす」

「ムハハアなに、山は、山でござる。オオそれ、それ、あんの山から、こんの山へ、飛んで出たるはなんりやるろ。

頭にふつふと二つ細ふて、長ふてりんとはねたをちやつと

すいた。兔ぢや」

「ハハハハハ」

「なにをもうすぞ。シテ西の宮はまだか」

「もはやこの森のうちでござりまする」

「さらば参詣をいたさう。手水〜」

「ハアア」

「まづ鰐口に取りつかふ。ぢやぐわんく、いかにもうし上げ候。われこの年まで無妻なり。三郎殿の利益にて、定

まる妻を授けたまへ、授けたまへ」

と一心こめて伏拝む。

「ヤイ〜太郎冠者。汝も拝め」

「畏つてござる。ぢやぐわんく。いかに木比須三郎殿も
うし候。われも定まる妻はなし。似合ひ相応美しき、妻を
お授け〜」

と三拝九拝したりける。

「ヤイ〜太郎冠者。今宵は通夜をせう。汝もまどろめ」

「畏まつてござる」

アラとうとや〜、内陣のうちぞゆかしきわが妻を、千代
と契らん手枕の、袖を覆ふて、まどろみしが、ほどもあら
せず夢さめて

「ヤイ〜お告げがあつた〜。汝が妻になる者は、西の
門の一の階にあらうほどに、つれて帰れとお告げがあつた」
「これはいかなこと、私がお告げもそのとほり」

「いそいで参らう」

「参ります〜」

勇み悦ぶ足元に、落ちたる竿を取上げて

「ヤこれはいかなこと、妻ではなうて、竹の先に糸がついてある。これはなにであらうぞ」

「ハハ不思議なお告げでござりますな」

「ヤこれは悟った。恵比須殿は普段釣竿を放さず釣ばかりしてござるによつて、この針で妻をつれといふことであらう。まづ急いで釣りませう。エイ〜」

釣ろよ〜、神の教への釣針を下ろしめよき妻を釣ろよ〜。

「ハハハハハ」

針をおろせば

「ヤイ〜、太郎冠者かかったわかったわ」

「ナニかかりましたか」

「とても〜、おもしろいや。チャット来て腰を取れ〜」

「畏つてござる」

「ハアテそれがしではない。お妻さまの腰を取れ」

「心得てござる」

「エイ〜、ヤアットナ」

不思議やな気高き女を釣り上げて

「アラありがたや〜、さてもよい妻がかかつてござる。うれしや〜」

「なにがさてお悦びでござる」

「コレ〜そなたは定まる妻ぢやによつて目を掛けてやるほどに、夫を大事にしませうぞ。ヤ小野小町か楊貴妃か、アラ美しや〜」

アラ美しや〜

「イヤもうし〜道々こつそり楽しまうと、背中へ入れて

来たこの吸筒、お二人さまの三三九度。これにて目出たう

御祝言」

「ヤこれは一段のことぢや、サア〜つげ〜」

「心得て〜ぞいな」

「まづ女子の方よりさしませい」

「心得ました」

「もうしわが夫、かならず見捨てて下さるな」

「なんの見捨ててよいものか」

「オ、嬉し」

「ヤイ〜太郎冠者、祝して一つ謡うてくれ」

「心得て候。高砂やこの盃が」

「二世の縁、神の御前で祝言は、三郎さまがお媒人、よしなまうじ

それとても浮気心があるならほんに、罰が当るであろういな。かならず見捨て下さるな」

『やいのやいの』と寄添へば、そばに聞きゐる太郎冠者

気をもみあせり

「ヤもうし〜、その釣竿を私にお貸し下され。見事釣つ

て見せませう」

「はやう釣れ〜」

「イヤモ釣る段では〜ざらぬ。まづお二人様はそれにて御見物下さりませ。まづ〜、エイ〜釣ろよ〜、釣るものは何々、鯛に鯉に恵方棚に撞き鐘、信田の森の狐にあらぬ。釣針をさげて、おろして、三十二相揃ふた十七人を釣らふよ〜。おかっさんを釣ろよ」

よねんもながき鼻の下。

「オオ当るぞ〜。どっこいしめた。アラとうとや、掛つたわ〜。サア〜こちへ〜ざれ〜。アア嬉しや〜。サア〜これからは三三九度の盃ぢや。なにも恥しいことはない。そなたと夫婦になるならば春は花見夏は涼み、秋は月見の酒盛りに、冬は雪見のちんちん鴨、天にあらば比翼の鳥、地に又あらば連理の枝、必ずそもじは変るまいな」

「なんの変つてよいものかいな」

「ヤレ嬉しや〜、まづなにはともあれ御面相を」

と被衣を取れば『こはいかに』鯨に等しき醜女ゆゑ

「ヤアわごりよは鬼か化物か。のう消えてなくなれ〜」

「のう〜わが夫、今仰つた楽しみは、嬉しうて〜、わたしや忘れはせぬわいな」

「ヤレ情ない赦いてくれ、〜」

「そりやつれないぞえ、太郎冠者殿。コレこつちら向かん

せエ、エ、なんぢやいなア。思へば深い恋の洩沈むわが身

を釣糸に、結んだ縁の西の宮、蛭子まうけて、二世三世、

変わらぬ色は棹竹の末葉栄ゆく夫婦中、放れはせじ」

と取すがる。

「のう恐ろしや〜」

「ヤイ〜太郎冠者。三郎殿の授けたまひし妻ぢやによつ

て、いなおうはなるまいぞ」

「アアそなたさまは、よい月日の下でお生まれなされた。

この太郎冠者は月も日もなく、暗闇で生まれたと見えます」

「なにはともあれ、目出たふ舞ふではないか」

「エ、勝手にさつしやれ」

高砂やこの浦船に帆をあげて、月諸共に舞の袖、女蝶男蝶の仲もよく遠く鳴尾の沖の石、堅い契りは住吉の、千代に八千代をかけ橋や、千秋万歳の千箱の玉を奉る。

「目出たいな」

「ヘンお目出たふござります」

「それがしが妻はいづくへ参つた。アレ〜太郎冠者が身

共の妻を連れて行きをる。アノここな横着者」

「ナニ太郎冠者が美しい女を連れてゐたとナ。エ、腹が立

つ〜、くひついてやろ〜」

「アノここな横着者、やるまいぞ〜」

「腹の立つ〜、くひさいてやろ〜」